

古代日本の〈山口〉の意味

牧田 忍
日本大学大学院総合社会情報研究科

The Meaning of the Entrance to the Mountain in Ancient Japan

MAKITA Shinobu
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

If you want to learn about Japanese culture deeply, it is important to go back to the origin of its history. To trace the history leads to understanding of nature and culture.

Especially in Japan, a lot of literary works and arts have arisen from reverence for mountains. It suggests that mountains are connected with Japanese culture closely.

Therefore I would like to discuss spiritual entrance of mountains from a historical viewpoint.

1.はじめに

国土の8割近くが山あいに位置している我が国では、山を基礎とした信仰・説話が数多く生まれている。自然景観と文化は密接に結びついており、日本人の山への観念には、日本文化の本質を規定する有用な素材が凝縮されていると言えるだろう。

こうした文化的特色の中核に山中を異界と見る観念が存在する。山中を異界と捉えるのであれば、異界と日常を隔てる山の出入口である〈山口〉の位置やその意味は重要である。すでに境界は、歴史的な空間として着目され、網野善彦氏や赤坂憲雄氏らの考察があり、柳田國男氏や折口信夫氏らが築いた世界觀がある⁽¹⁾。

それらを参考にこうした〈山口〉の世界はいつ頃に成立したのか、そこは、どのような場所だったのか、本稿ではそのような問題について考えてみたい。

2.山岳信仰と〈山の神〉

日本における信仰や説話に登場する山の多くは修驗道・密教などの行者が過酷な修行する場所であり、鬼や天狗などの妖怪が住む場所、あるいは先祖の靈である〈祖靈〉が鎮まる異界として登場する。

その一方、山は妖怪たちの住む所としてだけではなく、神が降臨する場所でもある。そして神は、そ

の土地を居住地と定める場合もあるし、山そのものが、ご神体として崇められる場合もある。それ故に〈山は一般の人々が迂闊に入つていけない場所〉であり、入山するにしても〈山の神〉に対して相応の儀礼や身支度などが必要とされた。こうした〈山の神〉は、杣人・木挽・狩猟者・鉱業者などの山に関係する者だけでなく、漁をする者からも信仰されている。この神は平野に住む農民とも関係が深く、里において〈山の神〉は〈春には山から里に下り、秋の収穫祭後に山に戻る〉、と伝えられるなど、幅広い人びとから崇敬をあつめている⁽²⁾。

柳田國男氏は「山ノ神」を「最も由緒を知りにくい」と述べている⁽³⁾。確かに代表的な〈山の神〉である大山祇神をみても、亦名を(和多志の大神)とか(酒解神)などとも呼ばれており、(和多志)は(渡し)とも、あるいは海を表す〈わた〉とも解釈されることから山祇関係だけでなく海水運などの交通の神として信仰されている。また、酒造の神としても信仰をあつめ、大山祇神を祀る社は約一万社におよんでいる⁽⁴⁾。さらに水に関わる伝承・祭祀も多いことから〈山の神〉は、水の神でもあり様々な顔を有している。男神なのか女神なのかもよくわからないのである。

〈山の神〉は大山祇神だけではない。〈山の神〉は、

時には河童や神使の動物として現れたり、巨木や巨岩であったりもする。祖靈と結びつくことも多く、実に複雑な神である。

山岳信仰研究に拠れば、日本の山岳信仰は自然信仰・精靈崇拜からはじまったといわれ、やがて山岳を精靈や神々の住む靈地として崇める信仰が生み出されたとされる。仏教伝来後、それ以前にはすでに存在していた〈山は聖地〉であるという観念の下に、聖地で刻苦修行することで靈力を頂き仏道を成就する修驗道が成立した。時代を経ると密教が盛んになり、曼荼羅信仰が普及すると、山を胎蔵界の峰、金剛界の峰と想定するようになり、大日岳、薬師岳など仏教的な名がつけられるようになった。さらに阿弥陀信仰が流行し、西方淨土が渴仰されるようになると、山には死靈が集う、という山中他界觀念と結合し、これを発展させていったと言われている。つまり、〈山の神〉は自然崇拜からはじまり、仏教・修驗道・密教・淨土思想あるいは土着の民俗信仰などの重層的な関係異同や神仏習合の中で生起・変容したものとみられている⁽⁵⁾。

このような信仰の変遷を瞥見すると、日本の山岳信仰は、自然崇拜と〈山の神〉への崇敬に大別できる。そして、〈山の神〉の信仰に着目した場合、その実態は時代や地域に応じて変容し、昨今では複雑な様相を呈しているが、〈山は別の場所である。〉→〈何故ならば神様や妖怪が住んでいるから…〉という異界の論理は長きにわたり広く通有している点が重要であろう。

3. 〈山口〉の成立

「山ノ神」の登場に関し、柳田氏は、山の神は山口の神であり、大和民族の厳重な慣習にもとづく「祖先の日本人が自分の占有する土地と未だ占有せぬ土地との境に立てて祀ったもの」とみて、その起源を新しくないと想定している⁽⁶⁾。桜井徳太郎氏は山神の靈験に関し、「山麓の里宮が山頂の山宮よりも時期的に早い時代の成立である…」と述べており、〈山口〉の神を古く位置づけている⁽⁷⁾。

それでは、いつ頃から山に神様が住みはじめたのであろうか。

我が国の山岳信仰の始原は、自然の驚異の恐怖に

基づく自然崇拜に求められることが多いが、縄文時代の人々は意外と山に入っている。山頂から縄文土器が発見されるケースは多く、山梨県釈迦ヶ岳、滝戸山、三ツ峠山、甲斐駒ヶ岳などの山頂で縄文土器が検出されている。今日において山岳信仰の対象として名高い長野県八ヶ岳・長野県蓼科山・岐阜県伊吹山・滋賀県比叡山・兵庫県六甲山、埼玉県雲取山、神奈川県大山などからも縄文時代の遺物が確認されている。武藏国式内社の秩父神社とつながりが強い埼玉県武甲山山頂付近でも縄文時代の土器が確認されており、養老元年(717年)に泰澄大師が開いたとされる福井県文殊山の山頂付近からも縄文時代中期や後期の土器が発見されている。このように〈靈山〉に最初に登攀したのは縄文人である事例は比較的多い⁽⁸⁾。

縄文時代の人々が何のために山頂を目指したのかは定かではないが、奈良時代に成立した古代文学で語られる山の世界が〈神が降臨して鎮まる聖地〉であることと比べると比較的自由に山を往来していた印象がある。近年活発に進められている縄文ランドスケープ論によれば、縄文時代の人々は山岳景観を集落形成に利用し、季節や天体の動きを把握する目印にも用いたと推察されている⁽⁹⁾。黒曜石流通の研究成果も目覚しいが、石材ルートなどからみても縄文人はかなり山地に入っていることが明らかにされている⁽¹⁰⁾。

弥生時代に入ると自然への崇拜だけでなく銅鐸などの青銅祭器が崇拜の対象となった。こうした青銅祭器は集落遺跡から隔絶した山の中腹などから検出される事例が多い。358本の銅剣、6個銅鐸、16本の銅矛もの大量の青銅祭器が出土した島根県神庭荒神谷遺跡は『出雲國風土記』(出雲郡)で神が座す山と言われる〈神名火山=カンナビ〉に比定されている仏經山の麓に位置している。神庭荒神谷遺跡の近接地とも言える当遺跡東方5kmほどに位置する島根県加茂町加茂岩倉遺跡からも丘陵斜面部から銅鐸39個が出土している⁽¹¹⁾。当遺跡から『出雲國風土記』に記載されたカンナビを眺望することはできないが、遺跡から谷筋を経て東方5kmほどの場所は『出雲國風土記』(大原郡)で〈山の頂に青幡佐草日子命の御魂が座す〉と伝えている高麻山が聳えている。

小林行雄氏は青銅祭器が日常社会と隔絶した場所に埋められる背景を「すべての銅鐸が地下に隠匿されたということは、正統な所有権を主張しうる個人がいなかった…個人に託さずに、共同の監視下におかれたものとみられる。銅鐸が共同体の祭器であり、宝器であったと説かれるゆえんである」とみている(12)。氏が示すように考古学者の多くは共同体の社会構造の変化が青銅器埋納に影響したと捉えるが、こうした出土事例に際し、山が共同体の日常から離れた存在として意識されていたとみることもできるだろう。

また、神庭荒神谷遺跡の近傍はこの遺跡発見以前から、大場磐雄氏や谷川健一氏らによって弥生時代遺跡と山の関わりが着目された地域でもあった(13)。弥生時代に特定の山が意識されて青銅祭器が埋納されたのかどうかは今ひとつ判然としないが部分はあるが着目すべき歴史段階であることは間違いない。

一方、古墳時代になると特定の山に対する特別な意識が顕現している。奈良県三輪山麓では3世紀代に纏向地域に〈古墳〉や〈都市〉が出現し4世紀代に至り大規模な古墳が造営された。遺跡の動向を見てみると、3世紀代の古墳の築造は三輪山の北麓である纏向地域が中心であり、今日、大神神社が坐している三輪地域への進出は見られない。おそらく祭祀と墓域、居住区域などのそれぞれエリアが意識されていたと考えられる。近年の自然科学分析の成果に拠れば当該地域の初期古墳の築造年代を遡らせる動きもあり、こうした見解に追随するのであれば三輪山麓の祭祀は3世紀の早い段階あるいは2世紀代に遡る可能性さえある(14)。

最も古い山岳信仰の一つと考えられる三輪山は、美しい円錐上の山容を呈し、大物主神の坐する山として称えられて今日に到っている。現在、山の南西部に〈山を御神体〉として崇敬対象とする〈日本最古の神社〉と言われている大神神社を中心に多数の摂社が坐し、三輪山北西を流れる穴師川を隔てて穴師坐兵主神社が鎮座している。大神神社及び穴師坐兵主神社とともに『延喜式』式内社の名神大社として列せられており、当山麓の極めて限定された範囲に二つの最高位の神社が鎮座している。山麓の祭祀遺跡からは、無数の石製品・須恵器・勾玉・臼玉・管

玉・小形銅鏡などが出土したという。考古学的知見によれば三輪山の祭祀遺跡の始まりは4世紀中頃まで遡る可能性があるが、5世紀後半には滑石製・土製模造品や須恵器を用いた祭祀形態が確立し、6世紀代において現在の禁足地周辺に祭場が限定されたと考えられている(15)。

『記紀』における三輪山に関する伝承を分析した阿部眞司氏は、物語構造に見られる塗矢伝説『古事記』(中巻神武天皇)や苧環伝説『古事記』(中巻崇神天皇)、箸墓伝説『日本書紀』(巻第五崇神天皇十年)などの神婚譚は特定の製陶・製鉄職能集団に伝わる伝承と類似すると見ている(16)。

製陶・製鉄については、考古学的成果に拠ると古式須恵器窯の操業が5世紀代に開始されたと言われ、当該期に古墳での多量の鉄製品の副葬が活発化している。6世紀代には製陶・製鉄は広く浸透している。苧環伝説に特徴的な糸に関する機織り技術の伝来も5世紀代と考えられており、概ね我が国に製陶や製鉄が浸透した時代と一致する(17)。

古代文学及び考古学的知見を併せて三輪山の祭祀を捉えてみると、3世紀には山麓に古墳が造営されはじめ、5~6世紀代にはすでに〈神が住む山〉として日常空間との区別が確立されていたものと思われる。つまり柳田氏らが〈新しくない〉とみる山の神は、当該期に顕現した可能性が推察できる。

4.三輪山と大山祇神

『日本書紀』の三輪山の伝承によれば、崇神天皇の時代に〈大三輪の神〉の子孫であり甘茂君(賀茂・鴨)や三輪氏の祖先にあたる大田田根子を、今日では古式須恵器の窯業址として有名な陶邑(大阪府堺市付近)から招いて三輪山に坐する神の祭主として祀ったところ国が治まったとある。大田田根子は〈大三輪の神〉の子孫という点で、神武天皇の后となる姫蹈鞴五十鈴姫命とも同祖にあたる。姫蹈鞴五十鈴姫命は事代主神が現在の大阪府高槻市・茨木市付近の三島を勢力圏とした三島溝櫛耳神の娘である三島溝櫛姫(三島溝昨姫)のもと通って生まれた子とされる。一方、『古事記』で三島溝昨姫は、〈大三輪の神〉と考えられている大物主神との関わりが記されている。

殿戸に対ひ立ち、自ら大物主神と称りて曰はく、「天皇、復な愁へましそ。國の治らざるは、是吾が意なり。若し吾が児大田田根子を以ちて吾を祭らしめたまはば、立に平ぎなむ…」

…天下に布告らして大田田根子を求ぎたまふに、即ち茅渟県の陶邑に大田田根子を得て奉る。

『日本書紀』卷第五 崇神天皇(七年二月-八月)

其の麻の三匁遣りしに因りて、其地を名づけて美和と謂ふぞ。(此の意富多々泥古命は、神君・鴨君が祖ぞ。)

『古事記』中巻 崇神天皇

此大三輪の神なり。此の神の子、即ち甘茂君等・大三輪君等、又、姫蹈鞴五十鈴姫命なり。又曰く、事代主神、八尋熊鰐に化為り、三島溝櫛姫に通ひたまひて、或に云はく、玉櫛姫といふ、児姫蹈鞴五十鈴姫命を生みたまふ。是、神日本磐余彦火火出見天皇の后と為る。

『日本書紀』神代上(第八段)一書第六

庚申年の秋八月の癸丑の朔にして戊辰に。天皇正妃を立てむとし、改めて華胄を求めたまふ。時に人有りて奏して曰さく、「事代主神、三島溝櫛耳の女玉櫛姫と共に生める児。号けて媛蹈鞴五十鈴媛命と曰す。是、国色之秀者なり」とまをす。天皇悦びたまふ。

『日本書紀』卷三神武天皇前即位紀庚申年八月

三島の溝咋が女、名は勢夜陀多良此壳、其の容姿麗美しきが故に、美和の大物主神、見感で…

『古事記』中巻 崇神天皇

上記の事例から、三輪山地域は三島や陶邑といった大坂平野一帯の地域との強い関係性が確認できる。そして、『伊予国風土記』逸文が伝えるところでは、現在、山祇信仰の代表的な神に位置づけられている大山祇神は、仁徳天皇の時代に百濟から津の国の御嶋(三島)に渡來した、とされている。

坐す神の御名は大山積の神、一名は和多志の大神なり。この神は難波の高津の宮に御宇ひし天皇の御世に頼れたまへり。この神、百濟の国より渡り来坐して津の国の御嶋に坐す

なり。御嶋と謂ふは津の国の御嶋なり

『風土記』逸文伊予の国

こうした歴史的由緒を有する三島近傍に比定される現在の大阪府茨木市には溝咋神社が鎮座している。当社の由緒によれば大阪の淀川と並行して流れる安威川の水利を管理していた三島溝咋一族の神社で、神社の正殿には溝咋姫・五十鈴媛の母娘が祀られ、相殿には溝咋姫の父である三島溝咋耳命が祀られている。境内摂社には事代主神が祀られている。

溝咋神社の近郊には式内社の論社に比定されている三島鴨神社(大阪府高槻市三島江)と鴨神社(同市赤大路町)の二社が鎮座している。鴨を冠する神社は事代主神とつながりが強いが、当社や鴨山口神社では大山祇神も祀っている。〈大三輪の神〉の子孫にあたる賀茂氏は大山祇神も奉じていたと見られる。

三島鴨神社の由緒によれば、〈仁徳天皇が河内の茨田堤を造ったとき、淀川鎮守の神として百濟より、攝津の御島にオオヤマツミを勧請した〉とされる。一方の論社である鴨神社も百濟からの渡来神を祀ったことを強調している。三島鴨神社の社伝によれば、当地付近に勢力をはっていた物部の韓国連も鎮守に協力したとされることから当地は、渡來した神や人々が満ちていたと考えられる。

『記紀』によれば、応神天皇・仁徳天皇の御世における大阪平野一帯の大規模河川改修の様子を伝えており、『風土記』や溝咋神社、三島鴨(鴨)神社の由緒などをあわせて考えると当該期には、秦氏などが関わった渡來技術による治水や灌漑、土木開発が相当程度進められていたと考えられる。

その過程で大山祇神は、三島溝櫛耳神や事代主命と並び重要な役割を担ったものと推察される。山部や山守といった山の管理に関わる職制が設定されたのも当該期であり、渡來技術集団の到来が山の神や山の管理に結びついた可能性が指摘できる。

此の御世に、海部・山部・山守部・伊勢部を定め賜ひき。亦、剣池を作りき。亦、新羅の人、參み渡り来たり。是を以て、建内宿禰命、引き率て、渡の堤の池、為て、百濟池を作りき。

『古事記』中巻 応神天皇

又、秦人を役てて、茨田堤と茨田三宅とを作り、又、丸邇池・

依綱池を作り、又、難波の堀江を掘りて、海に堀りて、海に通し、又、小橋江を堀り、又、墨江の津を定めき。

『古事記』下巻 仁徳天皇

冬十月。宮の北の郊原を掘りて南の水を引きて西の海に入る。因りてその水を号けて堀江と曰ふ。又將に北の河の撈を防かむとして、茨田堤を築く。

『日本書紀』仁徳天皇(十一年十月)

上記において、三輪山信仰の性格と代表的な山の神である大山祇神の関係について触れたが、地域的なつながりや山の神を奉じる点になどで双方には重なり合う点が多い。三輪山を祀った人々は、大坂平野の開発に関わった渡来技術や渡来神と密接な関係を備えた集団であった可能性が伺える。

5. 〈山口〉の性格

さらに大山祇神について考察することにしたい。『延喜式』によれば大山祇神は〈山口〉の名を冠する神社として奈良盆地一帯に分布し、飛鳥、石村、忍坂、長谷、畝火、耳無、支布、巨勢、鴨、當麻、大坂、吉野、都祁の八社を合わせて十四社が奈良盆地を囲む山地一帯に坐している。笠置山系に都祁・長谷・押坂、生駒葛城山系に巨勢・夜支布・鴨・當麻・大坂、大和三山に飛鳥、石村、耳無、畝火、吉野山系に吉野の山口神社が鎮座し、式内大社として高い格式を備えている。

山口神社の総領である葛上郡鴨山口神社をはじめ、畝傍山口神社、大坂山口神社の由緒は〈皇居の用材を献上する山を祭った〉旨を伝えており、伊勢神宮では〈山口祭〉(18)と称する〈皇室に木材を提供する〉祭祀が近年においても遷宮に先駆けて行なわれている。『出雲風土記』(神門の郷)『攝津国風土記』の逸文などにも山から木材を皇室に供出していった事例が散見できることから、山口神社周辺の山が木材を供出していった可能性は十分に考えられる。

しかし一方で、鴨山口神社は、確かに葛城山の入り口に鎮座しているが、地形的には扇状地に鎮座しており、〈大湊〉地名の名残が示すように河川交通の要衝でもあった可能性が高い。大坂山口神社の場合も小丘陵の近郊に鎮座しており、木材の供給地のイ

メージとは合致しない。『古事記』によれば、大坂山口神社付近では、一帯には兵士がうろつき道を封鎖していた、とあることから、むしろ当社は〈大坂越え〉の峠口や河内平野に通じる水運の交通要衝に鎮座し、近接する穴虫山口神社と共に要衝を固めているようみえる。當麻山口神社も〈竹内越え〉の要衝に立地しており、忍坂山口神社も神武天皇東征の最後の激戦地となった軍事拠点に立地するなど、ほぼすべての山口神社が要害に位置している。

故、大坂の山口に到り幸しし特に、一の女人に遇ひき。其の女人が白ししく、「兵を持てる人等、多た茲の山を塞げり。当岐麻道より廻りて、越え幸すべし」とまをしき。

『古事記』下巻 履中天皇

『日本書紀』によれば、邪馬台国女王〈卑弥呼〉のモデルとも称される倭迹迹日百襲姫命の予言によって武埴彦命の謀反を察知した天皇は五十狭斧彦命を派遣し、大坂から攻め入ろうとする吾田媛の軍を撃滅している。また、履中天皇の異母兄弟である水歎別命は、隼人を騙して墨江中王を暗殺させるが、今度はその隼人を騙して大坂の〈山口〉で暗殺するなど、陰謀が交錯している。

故、曾婆訶理を率て、倭に上り幸す時に、大坂の山口に到りて、以為ひしく、「曾婆訶理は…故、其の功を報ゆとも、其の正身を滅ぼさむ」とおもひき…其の山口に留りて…席の下に置ける剣を取り出して、其の隼人が頸を斬りて、乃ち明くる日に上り幸しき。

『古事記』下巻 履中天皇

武埴彦命、妻吾田媛と謀りて反逆けむとし、師を興して忽に至る。各道を分ちて、夫は山背より、婦は大坂より共に入り、帝京を襲はむとす。時に天皇、五十狭斧彦命を遣し吾田媛の師を撃たしめたまふ、即ち大坂に遡り、皆大きに破り、吾田媛を殺して悉くに其の軍率を斬る。

『日本書紀』卷第五 崇神天皇(十年九月)

山口神社が鎮座する付近から読み取れる軍事的な性格は大坂だけではない。『記紀』によれば苦難を乗り越え東征を果たした神武天皇は忍坂の〈山口〉では、土蜘蛛の反転攻勢に苦しみ、土蜘蛛を擊退し

た後も疲れ果て、援軍を要請することでようやく荒れすさぶ猛者たちを平定し檜原宮での即位をなした、と伝えている。

忍坂の大室に到りし時に、尾生ひたる土雲の八十建、其の室に在りて、待ちいなる。「歌ふを聞かば、一時共に斬れ」といひき。…其の土雲歌たむことを明せる歌曰はく…刀を抜きて一時に打ち殺しき。然くして後、登美比古を討たむとせし時に、歌ひて曰はく…又、兄師木。弟師木を擊たむとせし時に、御軍、暫らく疲れき…今助けに来ね…

『古事記』中巻 神武天皇

冬十月の癸巳の朔に…先ず八十梶帥を国見丘に打ちて、破り斬る。…既にして、余党猶し繁く、其の情測り難し。乃ち顧みて道臣命に勅したまはく、「汝、大来目部を帥ゐて大室を忍坂邑に作り、盛に宴饗を設け、虜を誘りて取れ」とのたまふ。道臣命、是に密旨を奉り、室を忍坂に堀りて、我が猛卒を選び、虜と雜居う…時に、道臣命乃ち起ちて歌ひて曰く…

忍坂の 大室屋に 人多に 入居りとも 人多に 来入居りとも みつみつし 来目の子らが 頭椎い 石椎持ち撃ちて止まむ

といふ。時に我が率、歌を聞き、俱に其の頭椎剣を抜き、一時に虜を殺す。

『日本書紀』卷第三 神武天皇(即位前紀戊午十月)

さらに『日本書紀』は、三輪山近傍の磐余邑や磯城邑、葛城山付近の高尾張邑といった山麓各地は激戦地であった旨を伝えている。

山に通じる要所には軍が配置され、特に墨坂では赤くおこった炭を設置して交通を封鎖したとある。やがて神武天皇は各所で待ち受ける多くの強敵を平定するが、最大の難敵であった長髓彦を下した後も磯城邑や葛高尾張邑に潜む〈土蜘蛛〉らは徹底抗戦を挑んだ、とも述べている。

これらはいずれも〈山口〉が要害であった証左として理解できる。

又女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置き、墨坂に煉炭を置く。…賊虜の拠る所は、皆是要害の地なり。故、道路絶え塞

がり、通ふべき処無し。…倭國の磯城邑に磯城八十梶帥有り。亦高尾張邑に赤銅八十梶帥有り。此の類皆天皇と距き戦はむと欲へり。

『日本書紀』卷第三 神武天皇(即位前紀戊午年九月)

是の時に、層富県の波哆の丘岬に新城戸畔といふ者有り。又和珥の坂下に居勢祝といふ者有り。臍見の長柄の丘岬に猪祝といふ者有り。此の三處の土蜘蛛、並に其の勇力を恃み肯へて來庭す。…高尾張邑に土蜘蛛有り。…磯城の八十梶帥彼処に屯聚居たり。…果たして天皇と大きに戦ひ、遂に皇師に滅ぼされぬ。故、名けて磐余邑と曰ふ。

『日本書紀』卷第三 神武天皇(即位前紀己未年二月)

上記において、『記紀』が語る〈山口〉が有する性格について概観してみると、軍事的性格が非常に強いことが伺われる。そして、そうした土地柄に渡来神である大山祇神が祀られた点は示唆的である。

一方、考古学的知見からも〈山口〉の性格は垣間見ることができる。例えば、長野県神坂峠で有名な蓼科山祭祀遺跡群は三輪山と同じような円錐状の山容を呈する蓼科山を遥拝できる峠上に立地している。その出土遺物に武具が確認されている。

こうした山中の祭祀遺跡の解釈は考古学者の間でも評価が分かれれるが、大場磐雄氏は、『日本書紀』の日本武尊伝承や『万葉集』を引いて、蓼科山の神を祀り、峠旅の道中安全祭祀や様々な祭祀が行なわれた=手向神の祭り、との見方を示している。その一方で、楫山林継氏は、祭祀遺跡の痕跡は一時的であり、出土遺物に武具が見られるのは軍事的緊張に基づく勢力の境界線を意味する、という見解を述べている(19)。

6. 渡来技術集団と〈山口〉

『記紀』で語られる〈山口〉付近で展開された激戦に際して、神武天皇は忍坂の決戦では酒宴で相手を油断させて打ち倒し、別の要害でも神酒を用いた祭祀で難敵を下している。正攻法では難儀する〈山口〉の攻略について〈酒〉を用いることで容易に進行したと考えられる。

并せて嚴壇を造りて、天神地祇を敬祭り、亦嚴呪詛をせよ

『日本書紀』卷第三 神武天皇(即位前戊午年九月)

「汝、大来目部を帥みて大室を忍坂邑に作り、盛に宴饗を設け、虜を誘りて取れ」とのたまふ。…「酒酣なる後に、吾則ち起ちて歌はむ。汝等、吾が歌ふ声を聞かば、一時に慮を刺せ」といふ。已にして坐定り酒行る。慮、我が陰謀有ることを知らず、情の任に径に酔ふ。…

『日本書紀』卷第三 神武天皇(即位前戊午年十月)

類似した叙述が『古事記』(応神天皇)にも見られる。それらの記述によれば渡来人がもたらした酒造技術による醸造酒でご満悦となった天皇は、酔った勢いで、要衝中の要衝である〈大坂の道に横たわる巨石を払い退けた〉とある。ここでも〈酒〉が〈山口〉を掌握する重要な手段として登場している。

又、秦造が祖・漢直が祖と酒を醸むことを知れる人、名は仁番、亦の名は須々許理等と、参ぬ渡り来たり。是に、天皇、是の献れる大御酒にうらげて、御歌に曰はく、

須々許理が 醸みし御酒に 我醉ひにけり 事無酒 笑
酒に 我醉ひにけり

如是歌ひて、幸行しし時に、御杖を以って、大坂の大き石を打てば、其の石、走り避りき。…

『古事記』中巻 応神天皇

応神天皇の御世になると百濟や新羅などから秦氏(弓月)・阿知氏・和邇氏・漢氏らが来日して酒造技術と並んで論語・千字文、鍛冶技術・織物技術・土木技術などを伝えたと記され、以来、多くの人々が渡来してきた旨が記されている。特に応神天皇の御世に渡來した秦氏は酒造技術に長けていたらしい。こうした『記紀』で語られる醸造技術は、渡來技術の一環であり、酒の記述は渡來技術の象徴であると理解できる。

この御代に…新羅の人、参ぬ渡り来たり。是を以て建内宿禰命、引き率て、渡の堤の池と為て、百濟池を作りき。亦、百濟の国主照古王、牡馬壱疋・牡馬壱疋を以て、阿知吉師に付けて貢上りき…又、百濟国に科せ賜ひしく、「若し賢しき

人有らば、貢上れ」とおほせたまひき。故、命受けて貢上りし人の名は、和邇吉師。即ち論語十巻、千字文一巻、并せて十一巻を、この人に付けて即ち貢進りき。又、手人韓鍛、名は卓素、亦、呉服の西素の二人を貢上りき。

『古事記』中巻 応神天皇

上記を踏まえれば『古事記』(応神天皇)に見える酒と大坂の記事は、

- ① 〈酒〉に象徴される外来先進技術が、大坂越えの街道整備を担い奈良盆地と河内平野を繋いだ。
- ② 〈酒〉に象徴される外来先進技術を背景に大坂付近に横たわるの敵対勢力を駆逐した。

という解釈が可能であり、いずれによっても〈山口〉を巡る軍事的緊張関係には渡來技術が関与した可能性が高い。そして、〈山口〉を巡る軍事的緊張関係の背景として、百濟より渡來した大山祇神が最初に坐した地域と言われる、摂津国の『風土記』逸文の記事に見ることが出来る。

吾が住める山に、須義之木あり。宜なへ伐り採りて、吾をして船を造らしめたまひ…

『風土記』逸文摂津の国

この記述は、水運における造船用の木材は山林に依存していたことが物語っている。技術集団の渡來交通手段が船であることを考えれば、造船用木材の獲得は生命線の維持に近いものがあったであろう。山林伐採・木工技術の観点からみればそれぞれの山口神社に伝わる〈宮中に関する材木等の献納〉という由緒にも通じる部分がある。

木材の伐採について『日本書紀』が伝えるところでは日本武尊が熱田神宮に献上した蝦夷の振る舞いが無礼であったので、倭媛命が蝦夷らを神宮に近づけないように命じて、三輪山麓に配置したところ、日が経たない間に三輪山の山林を伐採し、あるいは村人を威圧し出したので、天皇は蝦夷たちを遠方に置くことにした、とあり、木材の無断伐採には厳罰がくだされたようである。山中資源の厳重な管理の一端が推察できる。

是に、神宮に献れる蝦夷等、昼夜喧り譁きて、出入礼無し。時に倭姫命曰はく、「此の蝦夷等は、神宮に近くべからず」とのたまふ。則ち朝庭に進上げたまふ。仍りて御諸山の傍に安置はしむ。未だ幾時を経ずして、悉に神山の樹を伐りて、隣里に叫び呼ひて、人民を脅す。天皇聞しめして、群卿に詔して曰はく、「其の、神山の傍に置らしむる蝦夷は、是本より獸しき心有りて、中国に住ましめ難し。故、其の情の願の隨に、邦畿之外に班らしめよ」とのたまふ。

『日本書紀』卷第七 景行天皇(五十一年八月)

また、先に述べた三島鴨神社などの由緒が伝えるように大山祇神を淀川の治水対策に応じて渡來した神と見た場合、洪水対策に関わる土木・灌漑技術に関連して土止め木材、木工具調達のためには大量の木材を必要としたと考えられる。一方で土木・伐採・造船に関する工具、材料として鉄を必要としたことが予想できる。山に埋蔵する金属鉱床の確保は造船技術を担保する面でも重要であり、山は軍事上の拠点のみならず、権力基盤を担保する資源の場であったと考えられる。『風土記』では全国的な鉱床把握の様子を伝えており、鉱山には無闇に立ち入ることができなかつた旨が述べられている。

鹿放ちし山を、鹿庭山ち号く。山の四の面に十二の谷あり。皆鉄を生だせり。

『播磨国風土記』「讃容の郡」

桉見。佐用都比売の命、この山に金桺を得たまひき。故れ、山の名を金肆、川の名を桉見といふ。

『播磨国風土記』「讃容の郡」

…此は皆松山なり。…然れども香島の神山為れば、輒く入りて松を伐り鉄を穿ることを得ず。

『常陸国風土記』「香島の郡」

さらに、山中の資源は木材や金属に止まらない。神武天皇は要害に立ち塞がる敵の平伏祈願の際に嚴壀(神酒の器)・天平壀を用いたとあり、酒を用いた祀りは、外来技術としての須恵器と一対のものとして描かれている。

「天香山の社の中の土を取りて、天平壀八十枚を造り、并

せて嚴壀を造りて、天神地祇を敬祭り、亦嚴呪詛をせよ。如此せば虜自づからに平伏ひなむ」とのたまふ。天皇、祇みて夢の訓を承り、依て行ひたまはむとす。

『日本書紀』卷第三 (神武天皇即位前戊午年九月)

神武天皇がこの時、祭祀に用いた須恵器の原料は天香山から産出したものを椎根津彦が敵前突破を慣行して決死に持ち帰ったものと伝えられており、山は須恵器を作る埴土の採掘場でもあったことを裏付けている。『記紀』では酒あるいは酒に関する祭祀場面が幾度も登場するが、祭祀には須恵器が必要であり、その窯業に関する粘土や薪原料の獲得を山中に求めるのであれば、山中資源確保は古代祭祀の基底を為したと考えられる。

さらに山の資源の一つに水がある。山の神は〈水(源)の神〉、〈五穀豊穣〉の神とも崇められ、伊古麻・長谷・飛鳥・都祁・飛鳥に坐す山口神社が水を祭祀の対象とし、都祁・吉野では水分神が山口神社と同じ地域に鎮座している。〈山の神〉が水の神として崇められることはやや奇異な響きもあるが、水の源泉を山とみる観念は『風土記』に広汎に見ることが出来る。

水草河。源は二つあり。一つの水源は郡家の東北三里一百八十歩なる毛志山より出で、一つの水源は、郡家の西北六里一百六十歩なる同じき毛志山より出で、二つの水合ひて、南へ流れて入海に入る。

『出雲国風土記』嶋根の郡

大分河。郡の南に在り。この河の源は、直入の郡なる朽網の峰より出で、東を指して下り流れ、この郡を経過ぎて、遂は東の海に入る。因りて大分川といふ。

『豊後風土記』大分の郡

…石に触りて雲を興し、五の岳の最首にあり。濫觴水を分り、寃に郡くの川の巨きなる源にあり。

『風土記』逸文筑紫の国

この里の山の頂に井あり。その名を麻奈井と云ふ。

『風土記』逸文丹後の国

上記の事例によると、山は川と一体のものと見なされ、水源として認識されていたらしい。水は農業社会の生産基盤を営む上で重要な資源であり、自然環境面・土木灌漑技術面・水利権確保面のいずれからも水源は重要視され、酒造技術においても尊重されている。山の資源という枠組みで括れば、大山祇神を祀る意義は山・川とともに通有している

7.まとめ

上記、古代文学、伝承、考古学的成果をもとに、大三輪の神、大山祇神といった代表的な山の神の性格や『記紀』に描かれた山麓の動向などを通じて〈山口〉の意味を考察した。

山岳信仰研究の多くは、山は神や妖怪などが住む聖地であるために、山を禁足地として捉えているが、その一方で古代文学などが語る山の世界は、交通の要衝であり激戦地であった。また、山中は木材や金属、粘土などの資源の供給地、あるいは水源地として、技術集団が立ち入った足跡を読み取ることが可能である。

木材は治水灌漑に関する土木工事や宮殿の造営、造船のために不可欠であり、鉄も武器・武具・農耕用工具の生産などに必要とされた。窯業・土器生産に関わる粘土や薪も山中資源に求められていた。祭祀儀礼には須恵器等の陶器を必要としたことを考慮すれば、山中資源を管理することは祭祀儀礼の根幹にも関わったと考えられる。

山中は、少なくとも弥生時代には、祖靈や神が住む土地として信仰され、集落と山は、日常と非日常的空間として分けられていた可能性は高い。ただし、山中を『記紀』や『風土記』等の古代文学や伝承、考古学的成果を統合的に捉えてみると、5世紀から6世紀にかけて大阪平野一帯の開発に関わった政権の技術や経済的基盤であった可能性が高く、酒造・土木・治水灌漑・製鉄・造船などの先進的な技術を備えた渡来技術集団が山中資源の維持管理に関わったと考えられる。〈山の神〉の信仰がこうした背景のもとに、当該期に確立されたとみるならば、この神が有する多彩な側面が理解できる。

その意味において、〈山口〉は重要であった。つまり、〈山の神〉は、政権の要諦である山中資源の維

持管理や秘匿のために、山を異界とし〈山口〉を境界領域と位置づけて一般社会と隔離するためのイデオロギーとしても機能を発揮したとも考えられる。

我が国の山中は、長らく、神や妖怪、死者等の居住地として一般社会から隔離され、〈山口〉は、境界領域として機能してきたが、こうした〈山口〉の意味の淵源には上記で述べた歴史的経過が存在するものと思われる。

凡例

- ・『古事記』の引用については日本古典文学全集1『古事記』小学館を用いた。
- ・『日本書紀』の引用については、日本古典文学全集2.3『日本書紀』小学館を用いた。
- ・『風土記』の引用については日本古典文学全集5『風土記』小学館を用いた。

■ 引用・参考文献

- (1) 綱野善彦 1996『無縁・苦界・楽』平凡社ライブラリー 平凡社
綱野善彦編 1995『境界と鄙に生きる人々』(中世の風景を読む)新人物往来社
綱野善彦 2005『日本の歴史を読み直す』ちくま学芸文庫筑摩書房
赤坂憲雄 1989『境界の発生』砂子屋書房
赤坂憲雄 1996『山の精神史』小学館
折口信夫 1995 折口信夫全集第1巻「国文学の発生」(第一稿)〈第三稿〉中央公論新社
小松和彦編 2001『境界』怪異の民俗学8 河出書房新社
柳田國男『山村生活の研究』1968 定本『柳田國男集』第四巻「山民の生活」筑摩書房
- (2) 宮田登編 1983『図説民俗探訪辞典』山川出版社
柳田國男 1969 定本『柳田國男集』第十一巻「山宮考」一八 山の神は田の神 PP343~347 筑摩書房
- (3) 柳田國男 1968 定本『柳田國男集』第四巻「山民の生活」P502 筑摩書房
- (4) 神社本庁教学研究所研究室 1995『全国神社祭祀祭礼総合調査』全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会
平凡社編 1997『大和・紀伊寺院神社大事典』平凡社
川口謙二編著 1999『日本の神様読み解き事典』柏書房
- (5) 岩崎敏夫 1984『東北の山岳信仰』第2部資料 PP139-140 岩崎美術社

- 戸川安章 『修驗道と民俗』 1981 「一 修驗道のあゆみ 2 山に対する崇拜」 P47 岩崎美術社
- 宮家準 1978 『修驗道』 山伏の歴史と思想 1 修驗道の歴史 修驗道の発生 山人と山岳修行者 教育社歴史新書〈日本史〉 174 PP24~26
- (6) 柳田國男 1968 定本『柳田國男集』第四巻「山民の生活」 P502 筑摩書房
- (7) 櫻井徳太郎 1988 『日本シャマニズムの研究 上』 櫻井徳太郎著作集第5巻「第1章下北半島の巫俗と信仰」 p162 吉川弘文館
- (8) 今福利恵 2003 『「生涯学習やまなし』市民山梨学講座「山梨の山2」—山岳信仰の系譜—』 Vol. 37 September
原田昌幸 1998 『季刊考古学63』「縄文人と山」季刊考古学63 雄山閣出版
文殊山・楞嚴寺 文殊山と楞嚴寺「文殊山の歴史」
<http://www6.nsk.ne.jp/monjusan/> 2009/9/21
- (9) 富樫泰時 1995 『東アジアの古代文化』「縄文人の天体観測序説」
小林達雄 2002 『縄文ランドスケープ』
ジョーモネスクジャパン機構
小林達雄編 2007 『考古学ハンドブック』 新書館
- (10) 大竹幸恵 2004 『黒曜石の原産地を探る』鷹山遺跡群 新泉社
- (11) 田中義昭 1995 『荒神谷遺跡』 読売新聞社
佐原真 1998 『季刊考古学別冊7』「加茂岩倉遺跡と古代出雲」 雄山閣
- (12) 小林行雄 1959 『古墳の話』「5首長が司祭者であった時代」 pp50~51 岩波新書 岩波書店
- (13) 大場磐雄 1975 『古氏族の研究』「銅鐸私考」 永井出版企画
谷川健一 1979 『青銅の神の足跡』 pp10~12 pp61~62
- (14) 奈良新聞 2001 古墳期の始まり早まる? 伐採=築造に慎重論も 勝山古墳年輪測定(奈良新聞5月31日)
網干善教編『三輪山の考古学』 学生社 2003
清水 真一 2007 『最初の巨大古墳・箸墓古墳(シリーズ「遺跡を学ぶ」)』新泉社
- 千賀 久 2008 『ヤマトの王墓—櫻井茶臼山古墳・メスリ山古墳』(シリーズ「遺跡を学ぶ」) 新泉社
- (15) 寺沢薰 2000 『王権誕生』 日本歴史2 講談社
網干善教編 2003 『三輪山の考古学』 学生社
佐々木幹雄 1981 『古代』 69・70 「三輪山出土の須恵器」 早稲田大学考古学研究会
佐々木幹雄 1982 『古代』 71 「三輪山及びその周辺の子持勾玉」 早稲田大学考古学研究会
- (16) 阿部真司 1999 『大物主神伝承論』 第1章「さまざまな大物主神像」 第5章「『古事記』の中の丹塗矢伝承と芋環伝承第6章「箸墓伝承考—「崇神紀」の中での位置づけを中心に」 翰林書房
- (17) 佐原真ほか 2002 『日本考古学辞典』 三省堂 「須恵器」「織機」「生産(金属の生産)」の各項
- (18) 伊勢神宮式年遷宮広報本部山口祭
<http://www.sengu.info/gyoji.htm> 2009/12/4.
- (19) 大場磐雄 『神道考古学論攷』 輩牙書房 1943
大場磐雄「古東山道の考古学的考察」『國學院大學大學院紀要』第1輯 1969
大場磐雄 1970 『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』 角川書店
相山林継 1965 『上代文化』 35号「古代祭祀遺跡の分布私考」
相山林継 1991 『神坂峠』 神道考古学講座第5巻 雄山閣
桜井秀雄 2005 『金大考古』 第51号 「峠祭祀・雑感」

(Received:September 30,2010)

(Issued in internet Edition:November 1,2010)